

『規 範 論』 序 説

一 色 忠 良

1843年秋のある日、北スペインの片田舎プラット・デ・ダルトの隠れ家のテーブルの前に坐ったハイメ・バルメス (Jaime Balmes) は、一枚の紙をひろげ、その上に自分の、ある思想の概要ないしはテーマの根とも覚しき文字を記しはじめた。

「謙讓が真理だ。傲慢は憎しみとなる。虚栄はいやしむべきもの、しかももっとも一般的な感情だ。傲慢は気を添え、意を運んで、結果は物理的、精神的、煽情的な力をもたらす。それは侵害者だ。虚栄は、弱さと協調する、賞讃のなかの喜びだ。虚栄は、すべての感情とおなじく、未来を現在のため、堅固なるものを赫突たるもののため、有効性を快樂のために犠牲にする。それ自身、大事の源泉ではないのだ。最初の仕事をなしとげた人たちの動機は、ただ単に虚栄ではなかった。強い性格は傲慢に傾きやすく、弱い性格は虚栄に陥りやすい。栄光への愛も、虚栄を大きくしたものに過ぎず、感情としてはおなじこと、主体と客体の錯倒がある。男性は価値に、女性は美に、そして、ともに知識にうぬぼれをもつ。職人はその造営物に、兵士はその征服に、知者はその著作に、政治家はその政策に、といった具合に、すべてこれ虚栄だ。才人はうぬぼれるが、勤勉の人は、その性格についていわれるにあらずんば、前者のごとくではない。自慢する学生は、勉強せずに行き届くことを他に信ぜしめようとする。それなら、なぜ前者は後者以上にうぬぼれをもつのか。くだんの学生は、知識にもうぬぼれている。しかも、才能の見せかけは、いまだ知らずに残されていることについても延長していえる。行動のない限り、才能が認められることに喜悦を感じるものなのだ。虚栄は

もともと光である。それは、われわれについて、他人が考えることから受けとる喜びだ。それが先天的素質の問題になると、われわれがいかなる人物かということではなく、すくなくともいかなるものたりうるかということについて、別の範囲にまで拡大して考えられがちだ。われわれの虚栄のバロメーターは、われわれの評価と利害に刺戟を加えて、いっそうの効果を生ぜしめる。軍人の間では勇氣，婦人にあっては美，老人には分別，若者には雄々しさ，学者にあっては知識，詩人にとっては靈感，信徒には信心等々。謙讓が真理だ。それは、われわれが何たるかの誇張をわれわれに許さぬ。それは、われわれがどこからそれを受けとるかを、われわれに思いおこさせてくれる……。」

人間精神の能力を引き出す彼の労作の構成に、これら片々の思想が、どのようなつながりを成していったかは、知る由もないが、たしかに、ここに、バルメスに名著「規範論」を書かしめる有力な動因というか、あるいは動機感懐の文字といったものを、われわれは見てとるのである。バルセローナから逃れ来った危険からの解放ののち、心身のいこいと瞑想をもったバルメスは、やがて、聖書と祈禱書とケムピスの本のほかは一冊の本とて手もとになくして、わずか50日間に書きあげられたのが、彼の前記著書である。私が「規範論」と訳したのは、イスパニア語の原著書名「EI Criterio」のこと、ラテン語では *criterium* に当る。革命の発火点となったバルセローナの騒乱から逃れてプラット・デ・ダルトに移ったバルメスは、終日、社会とみずからが経験した過ぎ来し方をかえりみ、自室にひきこもり、瞑想を友として、聖職者の務めを果たしつつ寝食をするのほかは、そこを出なかつたといわれるが、そういった環境から序々に「規範論」の発酵が形を成していったのである。

1845年5月、ハイメ・バルメスによってものされた「規範論」の出版は、非常な成功をもって世にむかえられ、初版が売りつくされたあと、翌年はじめ、すでに二版の話がもちあがったほどだった。当時バルセローナにいて名

をなしていたサン・パブロ教会のドン・ファン・デ・サフォント師 (D. Juan de Zafont) は、バルメスの著作に接するや、「かくのごとき労作をわれわれが、いま、持ちうるとは、まったく、バルセローナが蒙った爆撃のおかげである。」とって感嘆したといわれる。

では、この貴重の労作を、以上の記録で察せられるとおりに、脱稿してから一年半の間、著者によって篋底深く蔵されていたということは、その間、政治紙発刊のもくろみで、マドリッド行きのことがあり、政治的問題への助言など、蒲柳の身に、多忙な時日が経過していたことを考慮に入れるとしても、いかなる事情によったのであろうか。先ず、考えられることは、脱稿したものに完全を期したという憶測で、事実、久しい内的練磨と思索とが生み出した論理学の綱要であるが、湧き出ずる思想をとどめる術をしらないものごとく、一気呵成に書きあげられた結果は、原稿の上で、章節の句切りも分けられないままにあったのである。この労作の新鮮さと一貫性の説明となりうる以上の事実はまだ、当初のインスピレーションの消えたとき、すなわち、間をおいて見直すことが必要でもあったということもいえるのであって、じっさい、バルメスの死後に見出された原稿の中に、印刷には回っていない手記風のものがあり、原稿に著者の手の加えられたことが立証されるのであって、このことがもし、出版のおくれとなっていたものなら、著述家として抑え難い上梓の衝動をおさえていたことは、それだけ彼の慎重さの大であったことが思われるのである。

「この著作の題名が、正確にその目的を表わす。旧来の人たちとはかわった方式による人間精神の能力を導き出す試論が、そこにつくりあげられている。それは、原理、規範、観察の総和であり、変化を統一でつなぐ。……本書がどんなものであるかを知る最良の方法は、どの著作の場合にもあてはまるうが、最後の章の最後の節を見られればよいと思う。」これらの著者の言葉からしても、彼が新著の価値に十分の良心をもって対していたことが理解されるのだし、したがって、出版のおくれは、やはり、彼の慎重さに帰される

と考えてよい。

このようにして、陽の目を見た「規範論」は、現在にいたるまで、これに匹敵するものがない個有の評価をもって、多数の真理を採求するものの友となってきた著作だが、ここで、彼バルメスがいう最後の章節（22章60節）を「規範論」に見てみよう。

「規範とは真理を知るための一方途だ。事物における真理とは事実のことである。理知における真理とは、事物をあるがままに知ることである。意志における真理とは、事物を健全なる道義の約束にしたがって、あるべき姿になさんとすることである。行為における真理とは、この善意の衝動によって動くことである。一つの目的が提起されるとき真理とは、その目的が、環境に適応し妥当なるように提起されているということである。方法の選択における真理とは、道義にそう方法、目的に導く最良の方法を選ぶことである。多種の真理が存在する、というのは、多種の事実があるからである。真理を知るにもまた、多くの方法がある。すべての事物が必ずしもおなじ方法で観られねばならぬというわけではなく、ひとつひとつ、最も良く観られる方法によってしかるべきだ。人には数々の才能があたえられており、どの才能も無益ではない。本質的に悪いものは一つもない。非力や悪意は、それらを悪用するわれわれの側からくるものである。立派な論理学は、全人をふくむべきものでなければなるまい。というのは、真理は、人間の全能力に関係して存在するからである。一つの真理に心向け、他の真理をないがしろにすることは、時として、後者を無力なものにし、前者をも逸することになる。人は小世界である。その能力は数あって、すこぶる種類に富む。よって調和を必要とするが、よい組合せのない調和はないし、ことおのおの、その処をえなくても、また、適時に、その機能が働かぬか停止されるかしても、当をえた組合せはないのである。人が、その能力について、なんらの行動に出ないままにいるなら、その人は、ぜんまいを失った一個の機械同然だ。もし人が、その能力を悪用するなら、それは調子の狂った機械と同等で

ある。理性は冷たいが、明確に事物を見る。理性に熱をあたえ、しかも、明晰をくらませないようにせよ。熱情は盲目だが、力をそえる。熱情に方向をあたえ、その力を利用せよ。理性を真理に従わしめよ。意志を道義に従わしめよ。熱情を理知と意志に従わしめよ。しかして、すべてが、宗教によって照され、導かれ、高められるように。そこに全き人、秀れた人が在る。このような人にとっては、理性は光をあたえ、空想は何かを描き出し、心情は生氣をあたえ、宗教は聖化するのである。」

もともと、バルメスが学生時代、最初に眼をかがやかせて読んだのは、論理学の本だった。彼は失望した、そして、それらの本は、あたえる以上のものを約束していると彼は思った。論理学は一個の学問であり、術すなわち、思考することを教える術なりと教える。だが、それらの書物の頁は、学問的基礎の間をどうどう巡りして、術に割かれるところがきわめてすくない、とバルメスには思われたのである。しかも、スコラ流の演繹法も、狭い領域の推理的学問ではともかく、実生活に関連する問題にあっては、無用にひとしく、論理の便益は貧弱なものになる。勉学時すでにそう考えたバルメスの感懐が、時をえて「規範論」を書かしめる誘因になるのであり、それは英知と根本的潜在力を啓くため、従来欠けている書物を補わんとする意図から出たものであった。感覚からくる過誤をいかにして避けるか。未熟の理知的判断をいかにして避けるか。人間の真実について考えられる、われわれの一般的規範は何であるべきか、等々の問題がそこにある。

「感情の助けをもたぬ思想は貧弱なものだ。」と現代に生きるイスパニアの思想家ホセ・マリーア・ペマン (José María Pemán) はいっているが、これを生々脈々の警句として受けとるなら、活動的で肥沃な思考を働かすかわりに、枯死したそれを羅列するにとどまる論理学の横行した往時は、もって思ふべきだろう。「規範論」の出現は、健全な意味では実存主義の予知を教える。それはまた、時とともに、われわれが感覚についてもつ考えを堅固ならしめ、心情の一部で、内分泌組織の化学的反應を生む熱情に方向をあた

え、あるいは、変更をもたらすことにもなる。そういった意味で、イスパニアの生んだこの天才的哲人の著作を、アウグスティヌスの「告白録」、パスカルの「瞑想録」、あるいは「イリアッド」にも比すべき人類永遠の書物とするものもあり、碩学メネンデス・イ・ペラーヨ (Menéndez y Pelayo, 1856~1912) をして「人生行路を大過なく歩まんとするものに彼バルメスは十分なるものをあたえる。」といわしめたのも、実にこの「規範論」を指しているのである。

深淵なもののなかにある単純化ということは、これを理解するのに、この世で最も難事とするところであろうが、バルメスの著書はそれを遂げている。歴史哲学の頁にことに、それを見る。しかも、カテキスタの明快さをもってそれを語り、一国の帝王にも、学者にも、はたまた子供にものみこめる程の文章で綴られ、有益たらざる簡処なく、有益を覚えざる人はない。現に、教皇レオ13世 (在位1878~1903) はこれを愛読したし、ブルボン家の王権請求者であったドン・カルロスの子ドン・ハイメ (Don Jaime, 1870~1931) は、これを福音書について、しばしば目をとおしたということだし、また、19世紀末バルセローナにデパートを創始したある実業人は、その成功の由って来たるところを「規範論」の読書に帰し、そのショウウィンドウのなかには、前記著書からの言葉が多く見られたという。さらに外国の例では、若い学徒たちの理想的指導について思いを回らせたすえ、ゼミナールで彼らにあたえるべきものとして、この「常識の法典」をとりあげ、理想の実現を期すべく、読書と研究を重ねたと語られている。また、このような事例も報告されている。——イスパニア北部の山中に立つ羊飼いの陋屋、まさに息をひきとらんとする彼の枕元に三冊の本があった。「公教要理」と「キリストのまねび」と「規範論」がそれで、彼にとっては、まさにそれ自身富める図書館であったのである。

この稀有の書物の論題からいって、それは (1) 父性愛を象徴する助言と同伴の書であり、(2) この上なく忠実な友として社会的交渉のあり方を教える

書であり、(3) 優秀なる教師として、教育の場を受けもつ書であり、(4) しかして最後に、人間精神の形成に熱意を傾ける意味で、司祭の役目をも果たしうる書であるといえる。

「規範論」のなかには、当然、護教論の概説がふくまれてくる。バルメスの全面的活動からあふれ出る宗教擁護の立場は、ほとんど生物学的必要をとおして、ここにも現われており、この哲人の観点からすれば、宗教的論文がらち外に置かれることは適當を欠き、人生の重要な問題に向けるべき思考を反省してみるなら、宗教への無関心を示すものも、不信仰をあらわすものも、ともに悪い思想家だというふうに解される。それは彼独自の規範学であって、したがって、たとえば、社会学、社会問題、国内諸法規、国際政治、法の重要性、力と自由間の均衡、学問の評価、はては、芸術鑑賞など趣味、嗜好の面においても、根本的なものに健全な規範をもたぬものは、すべて悪い思想の持主ということになる。ばかばかしい不合理きわまる規範のとりこになっている、善良にして教養ありと認めらるる人士が、他方に、存在しているということ、それは、意味する。じっさい、19世紀前半というバルメスの時代にあっても、またその後においても、良き信仰の主でいて、黒人の奴隷制度を社会的必要事と考える西洋人はいたのだし、今日ですら、労働者が何がしかの肉を日々食べる権利を否定する紳士もいなくはないのである。

このような彼の規範をあてて、そこから生まれたのが、先んじて1841年に出版され、内外に洛陽の紙価を高からしめた別の大著「プロテスタンティズムとカトリシズム」(El protestantismo comparado con el catolicismo en sus relaciones con la civilización europea) だったのである。

一般にバルメスの文章に接して、われわれの気づくことは、「彼の新聞人的論説では、表現形式は冗長過多で単調だ。彼の散文体は、明快さという点で光彩を放つが、色感と起伏をもたず、芸術的芳香には欠くところがある。」というメネンデス・イ・ペラーヨの批評にまつまでもなく、文節が長く、今日これを見ると、じっさい、冗長だという点だが、これはむしろ、隣国フラ

ンスのロマンチック風な著述家の読書による影響が、当時のイスパニアの論文、教説のなかにまで感染していた結果を考えてみる必要がある。イスパニアのなかでも、カタルーニャ語の語られる環境のなかで生い立ったバルメスだが、かの「ドン・キホーテ」(El Ingenioso Hidalgo Don Quijote de la Mancha)の模範的読み方をとおして、文法上の訂正を刻苦して怠らなかったといわれる。文節自体の冗長という点では、バルメスの書いたもののうち、「ピオ9世」(Pío IX)だけは例外だと、同時代の著名な公法学者ドノソ・コルテース(Donoso Cortés 1809~53)は見たが、後世は、どうやらこれを承認せずして「規範論」の方を推しているやに思われる。新聞人のドン・ホセ・プラ(D. José Pla)は、1948年7月22日付の「バルセローナ新聞」(Diario de Barcelona)に掲載の論文で、これを立証し、「プロテスタンティズムとカトリシズム」中の文節を引用して「規範論」の文体と比較、具体的に第一章をとり出して、簡潔で正確な文言だと断案を下している。

もともと、「規範論」は、前にも記したとおり、バルメスがかねて頭のなかで体系づけていた考えを、流れるままに、それを意図せずして、自然に写したふうの長大論文で、章節に分けなかったことはもちろん、註記も付さなかったのである。現在読まれている22章の体裁は、1845年、印刷に際して、後から附加されたものであって、ひとつの文節のはじめの思想と次の文節のはじめのそれとが、関連して書かれているのが認められるのも、それがためである。他面また、彼は、とくに、自制のなかからものを書いた。彼の生きた時代的、社会的環境が、それを十分に証明している。深い個性的な文体からくる体臭ということでは、わが西田幾多郎博士の論文をもおもわせる。

「規範論」を内容からみると、序論とそれにつづく思索的理解と実践的理解の二部から成る。はじめの三章が序論に相当し、そこでは、良き思考法の目的とするところと、その卓絶せる所以、さらにその実践的方法について考慮したあと、注意力の良さという資質が、条件として精神活動の適当な訓練に必要欠くべからざるものであることを宣明にしている。しかしながら、誰

もが、どんな外的秩序のなかでも、注意と関心をとどめ、良き思考をするために適しているかという、必ずしもそうはいかぬのであって、そこに実生活の面で、みずからの才能に適すると思われる職業の選択、従事ということが生じ、そのことはまた、前記方法に特別重要なこととして返ってくる。それゆえ、バルメスは、その原理から、人の専攻するところと、従うべき職業選択の重大問題をもってきて、全一章をさき、子供たちの才能の鑑識という範囲内で、必要な暗示と実際の基準を説く。

人めいめいが、その能力、資質に応じてふさわしい場をえたと仮定すれば、こんどは、適当な路線にそうて、その知的活動を善導すること、しかし、完全な真理に到達せしむるためには、そのものの他の能力が遂行せねばならぬ面を局限することが必要となってくる。この問題にこたえて、ここに、序論に述べられた問題の順序がかかってくる。すなわち、第一部においては、思索的理解の目的、その種々なる行為、その適当なる方法などが述べられ、さらに、真理を獲得するというおなじ目的に向って在る別の能力たる靈魂（感情、心情、想像力）にうったえる場合の周到な用意がそなえられ、最後に思索活動をおこなうのに最もふさわしい行き方であり、真理の直接的教授に対応せる歴史哲学と宗教哲学におよぶ。

第二部の実践的理解は、知るということに限定されずに、われわれをなすべき業務に導く案内人の役を果たす。思索におけるがごとく、真理の深思に沈むのではなく、行動において考える。行動は目的に向ってのみある。行動目的について扱われる問題は二つ、われわれの向けらるべき目的と、それに至る最適の方法は何かということである。由来、あらゆる人生の事象における考え方についてのこの基準は、それ自身で十分実際的問題を解決することになる。にもかかわらず、この著者が第二部として多くの紙幅を費していることは、実際問題に適切に焦点をもっていくために、新しい光を投げかけていると見てよからう。

およそ、あらゆる行動と作戦とにおいて成功をもたらすためには、その目

的と方法とに注意が向けられることが必要だ。日常の仕事にあっても、幸をつかむか不運をかこつことになるかは、一般的にいて、実践のために、真に根本的な基準を順守するかいなかによる。

《人はおのおのそのしわざの子供である。》(Cada cual es hijo de sus obras.) このバルメスの祖国にあることわざは、彼にとっては、まさに疑点の余地のないものである。われわれのすべての行動目的は、道徳的でなければならぬ。しかし、それだけでは十分とはいえぬ。そのうえに、人と環境の合致が必要だ。目的をわがものにする事の難事は当然として、その困難は種々の原因からおこる。そのひとつは、絶対たる最後の目的を除いては、すべての目的は、他の目的をうる手段たりうるのであって、ここに、ひとつ、あるあたえられた場合を想定すれば、いずれが目的に最もかなった途であるかを見つけるには、多大の省思と鋭敏とがものをいうことになる。

目的は、手段に適用されねばならぬ。達すべき手段がないのに、ひとつの目的を目指すことは、無害であるときでも時間の浪費になる。最も容易なことすら、不可能だといわれると、それをなし遂げぬ類の人が多し。内的手段も外的手段も、これを価値づけするということは、さほど困難ではない。だが、前者を考えるさい、二つの危険を避けねばならぬ。推測と臆病がそれである。推測は、とかく、われわれに、力の限界を越えた企てに仕向ける恐れがあるし、臆病はというと、われわれの所有するものの用途を思いとどまらせることになりやすい。臆病は、人間の一般的悪徳のひとつたる怠惰に拍車をかけることに気づくなら、それが活動を鈍らせ、われわれを、われわれ以下のものにさせるものであることを知る。

われわれが、われわれの行為に途をゆずるのに大切な、もうひとつの観点は、人の心が、目的そのものにかかわる情熱の影響下にある限りは、それがどんな目的であろうとも、われわれは、あえて判断を下したり、検討を加えたり、決定をはかつてはならぬということ、このことである。そのようなときには、色硝子をとおして、われわれはものを見ることになり、いっさいが

っさいがおなじ色にうつる。もし、このような場合に決定が急がれるとすれば、われわれは瞬時たりとも、情熱の影響外に身を置く仮定を設けることに努力すべきである。

情熱は悪しき助言者だ。にもかかわらず、それが、理性と道義に導かれるときは、有力な補助者となり、また、在り方によっては、理知に靈感をあたえ、意志に力と堅固さを加えるに必要な補助者ともなる。実践に必要な意志の力と活力は、二つの因子すなわち、思想と感情の結合の次第からその結果が生まれる。まこと、感情の支えのない思想はやせ、思想の支えのない感情は、意志をぐらつかせ、人をば不安定なものにする。思想が、途を示す光であるとすれば、感情は、何かを動かし何かを投げる力である。

バルメスの実践論理のなかに生まれるこれらのものの関連について示唆をうるため、イエズス会のミゲル・フロリー師 (P. Miguel Flori) の「規範論」出版 100 年記念に寄せられた、全集所載の「規範論」の内容分析を、次に借りてきてかかげよう。

「規範論」の内容分析

- 序論 良き思考法
 - I 良き思考法の定義 (1 章)
 - II 良き思考法の重要性 (1 章)
 - III 良き思考法を教授する実際的方法 (1 章)
 - IV 一般的な必須条件：
 - 1 良き注意力とは (2 章)
 - 2 適職の選定 (3 章)
 - V 一般的障害：
 - 1 適当な注意力の欠除 (2 章)
 - 2 不適当な職業 (3 章)
- 第一部 思索的理解

I その目的：

- 1 可能性と不可能性（4章）
- 2 存在と非存在：
 - ① 感覚からの直接的証明（5章）
 - ② 感覚からの間接的証明（6章）
 - ③ 人間の行為についての介入（7章）
 - ④ 別種の証明：
 - A 一般的な権威（8章）
 - B 新聞（9章）
 - C 旅行関係（10章）
 - D 歴史（11章）
- 3 本性、属性および事物の関係（12章）

II その活動：

- 1 知覚（13章）
- 2 判断力（14章）
- 3 推理力（15章）
- 4 直覚と靈感（16章）

III その方法：

- 1 教育について（17章）
- 2 創意について（18章）

IV その補助的能力：

- 1 心情（19章）
- 2 想像力（19章）

V その活動の特殊な二つの分野：

- 1 歴史哲学（20章）
- 2 宗教（22章）

第二部 実践的理解（22章）

I その目的：実践的行為あるいは行動の志向：

- 1 必然的法則に従う目的上の行動 芸術（1節）
- 2 自由意志に従う目的上の行動：
 - ① 道徳（1節）
 - ② 礼節（"）
 - ③ 家庭の管理（"）
 - ④ 政治行政（"）
- 3 行動の目的：
 - ① その適切に提起される必要性（2節）
 - ② その反対の場合に生ずる弊害（3節）
 - A 嫌われるもの（4節）
 - B 損なわれるもの（5節）
 - C 破産せる知識人（6節）

II 良き実践的理解の主要な素質：

- 1 判断の成熟（11節）
- 2 良識（"）
- 3 仕事に対して無能力を来たす欠陥（"）
 - ① 危疑的理解（7—9節）
 - ② 曲解（10節）

III 実践的理解の最良の手引：道徳

- 1 公私の生活における良き行動法：実践面での福音（32節）
- 2 前記欠陥の起源（12節）
- 3 その欠陥の一般性と由って来たる弊害（14—20節，24—31節）
- 4 キリスト教的謙讓の必要性（13節）
- 5 仕事に対する徳義の有用性（34，35節）
- 6 徳義の有力な補助知識（36，55節）
- 7 宗教は最高の哲学と一致する（44，45節）

IV 実践的判断のための原則：

- 1 熱情の影響下で判断を下してはならぬこと (37—41節)
- 2 その影響の外で考察すること (47, 54節)
- 3 力そのものを十分に知ること (21, 22, 42, 43節)
- 4 思想と感情 (59節)
- 5 完全なる人間 (31, 60節)

以上に見るバルメスの論理学の概要からわれわれに示されるものは、事物を完全に知り、われわれの実践行動を導き出すための、人間における知的、思索的かつ実践的活動の働き方である。

「規範論」の紹介で特異なところは、共通常識ということであるが、それは、あらゆる疑点を雲散霧消せしめる護符となっているという意味ではない。自明性という唯一絶対の権威をもつ常識は、直覚的知覚を要素とするが、これを本源的確証をえんとする理性とともに系統づけている点にバルメスの特徴がある。この著作のなかで、バルメスは、共通常識をば、本能、分別、良識、真知、健全理性というふうにいろいろの名を借りてきているが、それらが、すこぶる重要な展開を見せている。というのは、学識なるものの無知あるいは限界を暗示するからであって、じっさい、もしも、この共通常識が、場合により、哲学者たちの思いあがりや錯誤に対するブレーキとして働き、理性の代わりを務めるものなら、学識なるものの無知も、われわれの知性を示すはずである。したがって、常識は理性の限界の自覚を意味する。無知の人はものを知らない、それは知らぬということを知らない謂である。知に至って知らぬこと、すなわち、知らぬということを知ること、それは哲学であり、また哲学の在り方であろう。そのことが「規範論」のすべてを教えているといつてよい。

共通常識が哲学にその姿を現わすのはかなり新しい。なるほど、アリストテレスが古く、この言葉を造り出しているが、その心理的意味は、彼において

も、また後期スコラ哲学にもなく、あるへだたりがあった。それは、共通感覚に應ずる感覚中枢または総合能力として考えられた。アリストテレス的用語ではすなわち、人間におのずとそなわり、学問的、人為的論理の基礎になる共通道理 *ratio communis* であって、その心理的見地はストア哲学や前期スコラ哲学に密着して、やがて、自我の自覚とともに、常識として受けいられるべく、近代語に翻訳されるのである。ルネッサンスの最盛期に生きたイスパニアにおけるスコラ学派の指導者フランシスコ・スアールス (Francisco Suárez, 1548~1617) ですら、すべて知覚が受けいれる能力としての常識 *sensus communis* を語っている。*ratio communis* は、中世紀、スコラにおいて起った有名な普遍論争のなかで確立していき、それは、人知から出た形而上学に力をそえうるものと考えられた。スコラと絶縁してあらたな哲学を樹立し、認識の客観性を証明せんと努めたのがデカルトだが、彼にあっては、方法論的問題が規範を包摂しているものの、良識 *bon sens* をもって偽ものから真なるものを識別する能力としている。

フランスのイエズス会士クラウディオ・ビュフィエール (P. Claudio Buffier, 1661~1737) は、その深淵な著作「第一真理概論」 (*Traité des premières vérités*) のなかで、哲学者たちが余り語りたがらない常識から引き出される真理を分析しているのであるが、バルメスは、「哲学史」 (*Historia de la Filosofía*) のなかで、この哲人をとおして、フランシスコ会の鋭利な博士ドゥンス・スコートウス (Duns Scotus, 1266~1308) を始祖とするスコットランド学派に接するにいたったと明記している。

ある人たちによって、自明の理ともよばれた共通常識は、ドグマの定式を受けいれる唯一の器と考えられ、やがてフランス啓蒙期の百科全書家ジョセフ・ルイ・ラグランジュ (Joseph Louis Lagrange, 1736~1813) の著わす「常識、存在および独断的形式」 (*Le sens commun, l'être et les formules dogmatiques*) に見られるように、哲学的関心をあらたにするし、常識の表現は、英、仏の思想家たちに一種の秩序の語としてとりいれられた。常識の

哲学は、当然、純理に思索を没入せしめないことに連なり、哲学の根本的問題としての論理学やグノーシスを考究しないことにもつながる。

「規範論」のところどころに、ひとつの学説の価値を評価する試金石として常識があらわれるが、4章10節では、あらたな不可能性を弁別するため以外は、この言葉の介入を避けている。

バルメスは、共通常識 (sentido común) を定義する前に先ず、二つの言葉を分析する。sentido は考察を排除するもの、われわれがものを感じるとき、その心裡は、能動的というより受動的で、あたえずして受け入れる、とする分析によって、この規範の性格の一方を決める。したがって、理知は、感覚の法にしたがい、減滅することのない本能的必要にしたがう以外はないということになる。

común の語は、個人的なものをいっさい排除する。ゆえに、sentido común の目標とするところは、普遍的で、何びとにも通じ、客観的なことがあげられる。そこで、共通常識の規範は、知覚のそれと区別される。それは、われわれの心の法を意味する、とバルメスはいうのである。適用の場に順じて外面は相を異にするが、じっさいは、常におなじひとつの法が存するのである。しかして、常識なるものは、知覚によっても、理性によっても証明されることなく、すべての人が、知的、道徳的生活の必要を充たすためになくってはならぬ、ある真理に信頼せんとする、もって生まれたわれわれの精神的傾向のなかに存するものだ、とする。

前にあげたビュフィエールは、共通常識を目して「それは、自然がすべての人のなかに置いた用意で、もっと明確に言えば、人間大多数のなかに仕組まれたもの、理性を使い果たしてしまったときに、人間本来の知覚にふくまれる意味と異なる対象のうえに、共通かつ同一の判断をなさしめるためのものであり、それに先んずるいかなる原理の結果からくるものでもない。」とした。そこには、知的、道徳的生活の必要を充たすための云々という定義は現われていない。スコットランド学派の最後の哲学者ウィリアム・ハミルトン

(William Hamilton, 1788~1856) にいたって、「われわれが生存するうえにもつ必要のため、常識の原理を受けいれる要があるのである。」と語られている。

わがバルメスは、いっそう明確にこの問題の要点をつく。いわく、「われわれがしなければならぬことは、われわれの語るこの傾向が、事実、存在するかどうかを点検することだ。……そして、どの点まで、果たして真理の規範として考えられるかということだ。」と。さらに、「そこで、直接的に明かなる真理に関してこの傾向をわれわれは見出すのであるが、理知はそれらの真理を証明しないし、またしうるものでもない。しかして、たとえ、火勢のなくなった灯のごとく、みずからを空しくする苦しみはあろうとも、われわれはそれに同ずることを必要とするのだ。」というのである。「sentido (lat. sensus) の名が、本来の意味で適用されるためには、理知が、知るといふよりも感ずるといふことの方が必要だ。直接証明では、感ずるよりも知るといふことになる。」とも述べているが、けだし、表われてくる判断の主語と述語の関係が明らかでない以上、常識の真理の本質的条件であろう。

バルメスの言葉のままでは、判断の語は、分析的でないことを意味する。それゆえ、容認するということ、それは、証明からではなく、証明の原理からくる。明らかであるということは、バルメスによれば、分析的ならざる真実であって、常識に依存する。では、知って理解することと、感じて理解することとはどちらがうか。知識自体の慾望と知識に鋭敏な機能との間に存する相違はどうなのか。ここに、ひとつ、意識というよりどころがある。すなわち、意識の現象として考えられる先天的判断力をわれわれはもっている。さらに、もうひとつ、そのそと、はるか彼方に、むろん判断力自身ではない、何かの証左として考えられる意識というものがある。一は意識自身によって証されるとおり、明瞭なこと、他も単なる幻影ではなく確実に真理をもつ。バルメスが知る (conocer) と呼ぶのは前者であり、感ずる (sentir) と称するのは後者のことである。

共通常識 (sentido común) には、この意味がかかってくる。

「規範論」は、行動哲学に必要な提要进行をふくんでいる。人生の成功、不成功をにぎる根底のかぎが、大衆の手のとどくところに用意されていて、実際家のためのしごく興味のある観察と規範が、そこに見出されるのであるが、かといってプラグマティズムの行き方を示すものでも、むろんない。

1810年に生れ、1848年にイベリア半島の一角で、その短い人生の幕をとじた哲人司祭ハイメ・バルメスは、祖国イスパニアの運命の帰趨にみても、また世界史的に考えても、激動ただならぬ混乱のさなかに生きぬいた人物、されば「規範論」の誕生に先立つ素地に目を通してみるが必要になって来よう。

哲学者は時代を越えた存在だが、他面、生ける時代の子でもある。いかなる思想家も唐突に生まれるものでないからには、その時代を前にしたバルメスの態度に関心が寄せられる。「規範論」が、この哲人の最初の、しかも現時にいたるまで最も人々の話題にのぼる労作であることを考えるなら、このことは余計に重要に思えるし、「規範論」の内部そのものに入りこむゆかりともなろう。

彼を特徴づけるとすれば、一口に言って、反革命の哲人であったということである。反革命の哲学は、由来フランスの伝統学派の継承者たちのものだった。マヨルカ生れの歴史家ホセ・マリーア・クアドラド (José María Quadrado, 1819~1896)、バレンシアの著述家アパリーシ・イ・ギハーロ (Aparisi y Guijarro, 1815~1872) といった人士はこれにつらなるが、多大の靈感をもってこれを自家薬籠中のものにしていたバルメスは、たんなる踏襲者でも反復者でもなかったし、むろん、広い意味でも、この学派をつぐものでもない。彼のなかには位置の転換がある。ド・ボナルド (Vizconde Luis de Bonald, 1754~1840) とド・メーストル (Joseph de Maistre, 1753~1821) によって牛耳られたフランス伝統学派は、18世紀の哲学、ことに百科学派への徹底的な対立を意味する。つまり、それは純粹理性、個人主義、反

歴史および反伝統主義哲学に立ち向うもので、いいかえれば、人間をかくあるべしと規定した立場ではなく、かくあるとして表わす立場に立っていた。

ド・ボナルドも、ド・メーストルも、哲学上、思想上の学派ではなく、深く、社会的意味での伝統学派といえようが、ド・ボナルドは、1810年に、次のように記しており、そこにバルメスの書物に通ずるものが見られ、たしかに観念的なつながりを思わせるものがある。「要は、哲学がよい哲学であるなら、今日、それあることによって、何らか有用でありうるのか。また、一国政府のためにも、単に一家族のためにも、どうにか適用しうるのであるか。人は熱心にそれを求めてきたが、その場もその働きも、いっさいふさがれている。哲学にとっても何ら残るものはない。……」と彼は自問し、理性万能に対して回答を迫るのであり、理性の崩壊に対しては、それにかわるべきものに、社会のなかに印された真の保存本能をもってきたのであった。社会を導くものは、清められた理性であって、それは、伝統学派の見るところでは、フランス革命の一大変事をひき起した張本人たる哲学でも、哲学者たちでもないのである。

ここに、友人ホセ・フェレール・イ・スビラーナ (José Ferrer y Subirana) 宛に出した1838年9月7日付のバルメスの書簡がある。ペシミズムのいろが濃い、いわんとするところは、明白というより、単純といってもよい。——「最上の学校は不幸だ。しかり、不幸である。それは、われわれに警告をあたえ、われわれを慎重にさせる。それは、われわれの靈魂を高め、精神に強靱さをあたえる。幸福と喜びは浮薄なものであって、偉大な性格を形成せず、高貴な思考を生まぬ。あるときには、私は不幸だった。おそらく貴殿が思っていた以上に不幸だった。しかし、私には何ともないことだ。私は知っている。暗いわれわれの地上の生活は羈旅であり、不幸は、われわれに、それを思わしめるに必要なもの、ときとして、次のような考えにいたらしめるものであることを。すなわち、宗教は、人と社会の唯一の救済のよりどころだ。革命を見て、この結果を引き出さなかったものは盲目だ、と。」

対仏独立戦争の発火とともに国境に接して生れ、二月革命の勃発とともにその短い生涯を終えた彼は、終始、革命から尾をひくものの実体をつきとめざるをえなかったのである。バルメスの根本的見解も、要は、社会は、学問と哲学との業によってではなく、深く本能的に構成され、統制されているということだった。

「規範論」の素地を明かす第二の点は、先人たちの学問的影響だが、由来バルメスは、独学で自分の途をきずいた型の人である。16才までのピックにおける神学校時代、教師からうける教育とその行き方に満足しなかった彼は、司教館附属の図書館に入りびたり、のちセルベラ大学の課程に入ってから、その最初の形成を見るのである。読書と瞑想とが、バルメスに広く深い、人類のもつ知的文化を摂取する機会をあたえたのだ。「規範論」を見ると、その学説についても、いろいろの栄養分が見出され、偉大な先覚的哲人たちの思想のあとがあらわれている。アリストテレス、聖トマス、それにデカルトとパスカルなどがそれで、とくに、第二部の実践的理解の部分には、パスカルの「瞑想録」の影響が見られ、12章末尾の註記のように、史的人物の挿話もそえられている。バルメスの文章のなかから、考える輩としての人間のあのパスカルの思念が心にうかぶのだが、事実、「規範論」の著者は、その22章43節で、科学と人間学ということにふれて、パスカルの名とその事例を記している。また、

「人は自分自身を知ることにかかずらうことが絶えてない。」(22章54節)

「人は自分自身から逃避する。」(22章43節)

「人は自分自身を偽瞞するために偽善を用いる。」(22章41節)

これら三つのバルメスの命題からも、「瞑想録」の章句(136~143, 167~171)に脈絡のあることが肯定され、パスカルの一統なることを思わせる。

「人は悪いというよりはひ弱いものである。」(22章50節)ともいったバルメスにおける人間の知識は、実に精緻の高い段階に達していたというべきである。パスカルとバルメスのあいだには、思えば、約200年という時代的へ

だたりがあるが、ともに「瞑想録」と「プロテスタンティズムとカトリシズム」という護教論的立場から書かれた名著を残し、39才と38才の若さで世を去ったことも思いあわされるのである。

著者の力強い精神によって同化された先哲の思考は、彼の「規範論」によって、さらに重要な花を咲かせているとあってよかろう。そこで、第三の点として、バルメス自身の心性と人生経験とが、「規範論」の完成にもった決定的な役割が考えられねばなるまい。ビックの哲人は、この特異な著述のなかに、同時に反映されていて、「規範論」はバルメスの自画像ともいえる。一言でいえば、彼自身の性格と気質をとおして、世俗的事物の見方、対人関係の在り方、人生の認識の仕方などがあつかわれ、しかも、すべてこれらは、単純な規範に帰せられる。もうひとつの自画像とも見られる彼の文章「わが弁明」(Vindicación personal)にふくまれているような切迫感も熱っぽさも、そこにはなく、いわば、従前のいかなる論理的書物のなかにもなかったものが、出ているのである。バルメスはこの書で、旅行を語り、歴史哲学を論じ、また、ジャーナリズムにつき、事業経営の在り方その他につき、あたかも心理学者の鋭敏さをもって、彼が「人の心」(corazón humano)と名付けたその対象を、精細に調べあげ、詮索している。

さて、彼自身の境涯に目をあてると、年少期において孤独癖の強かったバルメスは、図書館にひきこもるか、自分自身のうちに逃げこむのほかはなす術をしらなかった。しかも、爆発的な活動家たるの因子を秘めて、なにかみたされぬまま、おのが知的情熱に身をこがしつつ、いわば籠の中の鳥として生れ故郷での時を過していた。大きな事業へ自身をひきあげんものと、あるときには、数学の教壇の狭さをうち破ろうとしていたのである。護教家にして哲人司祭たる彼バルメスが、社会的使徒の召命に応ずる周辺の問題については、今日でも批判の声なしとしないが、ともかく彼は、大衆との接触に身をおくことの、おさえがたいほどの必要を覚えていた。先ず新聞があった。それも、よくあるうぬぼれや人間的利益の刺戟からではなく、宗教的、政治

的ないしは社会的の高貴な理想から、公器として、新聞のもつ公報性を高く評価していたからであり、そこから、ジャーナリズムに対する確固たる使徒的召命を自覚したのである。それは、人々に改宗の途をひらくための最適の方法としてバルメスの前に横たわっていたもので、新聞によって実現される業への情熱は、彼の生涯のあいだ、消えることがなかった。「文明」(La Civilización)をはじめ「社会」(La Sociedad)、「国民の思想」(El pensamiento de la Nación)などにそのことを見る。「規範論」が、興味深い頁かを提供して、新聞のことと、それがのべる真実と判断の規準の確立について費していることは、それが、120年前にもものされたことを知るなら、一驚に価しよう。原因とそのゆくえによく通じていた彼は、どうしたら新聞事業がうまく組織されるか、どうしたら新聞がよくなるかといった実際的な問題がよく分っていたものと思われる。

バルメスは、必要にせまられて、瘦身蒲柳で、旅をよくした。すでに出版されていた「プロテスタンティズムとカトリシズム」のフランス語訳のことで、1842年春、パリに赴き、ついでロンドンに渡って、10月帰国したが、のち再びパリを訪ね、しばらく滞在した。マドリッドへは、むろん、数度の旅をかさね、いちどは地中海にそうバレンシアを經由して首都に向っている。鋭く、深い観察の眼の主バルメスは、旅先にある土地の風俗や習慣に興味をもち、人心のかくされている跡々をひろって歩いた。そのころの彼の書簡を目にするものは、バルメスがいかに旅に興味をつなぎ、また、そこから、どれほど有益な教育的観察をひき出していたかを知る。「規範論」の10章にはその実のあるところが載せられている。

書簡といえば、今日われわれがバルメスの書簡集をえているのは、まったく、著名なるイエズス会士カサノーバス師 (P. Ignacio Casanovas) の丹念なる努力の賜だが、そのおかげで、バルメスの生活の一端がすくなく明らかにされている。読書と瞑想という著述家の習練のなかにあっても、日々の現実に綿密に気を配る彼をしるのであるが、たとえば、弟ミゲルがビック

に設立した帽子工場の不振についても心をくぐさき、1842年2月18日付バルセロナ発信の手紙では、親友ホセ・セルダー（José Cerdá）にあてて、ビツクに残る帽子をすぐにバルセロナに送るよう、依頼したりしている。これらのことから考えて、バルメスが「規範論」の22章10, 11, 12および34節で、事業成功の規準を明快にしているのにも、ゆえあるかな、と興味がもたれるのである。

バルメスは、まったくダイヤモンド的性格の持ち主だった。計画に向う決意はくじけることなく、自分の名でものいうときには、高尚で、率直で、真摯であり、彼はまた、行動の人であった。みづからを律する厳格さと、成熟せる判断をひき出す深い洞察力、人間に関する豊かな知恵、いかなる障害をも乗り越えなければやまぬ堅固な意志、これらを合せもった資質は、いかなる難事をも克服し征服せずんばやまない。

書簡をとおして見られるバルメス、実践行動をとおして見られるこの哲人の性格と心理に関する描写が、彼の著書「規範論」のなかでは、完全な教説の形でその表現を見せているわけである。「意志の固さは、難業を仕遂げる秘訣だ。……自己にうち克ったものは、容易に、仕事にも、その他自分にかわりのある人々にも勝を制しうる。なぜなら、強固にして着実なる意志は、それ自身でおのずから——たとえ、それを有する人の他の資質を除外したとしても、人間精神のうえに、大きな力をあたえて、これを支配し統御することは確かだからである。……安らかな良心、前もって練られたる計画、堅固な意志、そこに、仕事をなし遂げるための条件がある。……しかしながら、知識のことでも、道徳のことでも、肉体上のことでも、また、一時的なことであれ、永久的なことであれ、すべて、たたかいに直面しないものは、勝利をかちとるものでないと定められているのだ。」（22章58節）

「規範論」は、人に高度の刺戟をあたえる書物である。正当にして、秩序のうえに立つ、有効な行動の真の便覧である。「規範論」では、先ず、思考法がとりあげられる。抽象的で平面的な思考のうえに立つ真理は、バルメス

の好まぬところで、彼は真理のために真理を貴しとすることを教えたものでもなく、また、行動のための行動を伝えているものでもない。「多くの事物に真理がある。多くの種類の事実があるからだ。」と彼は記している。バルメスの追求する真理は、聖アウグスティヌスの用語をもってすれば、健やかなる真理である。有効なるべき真理である。彼はまた、「正しいこと、有用なことは、ときに、別々に在るように思われる。しかし、短い時間のそとでは、常にそうありうるものではない。一見、正反対の途も向うところはおなじなのである。」(22章32節)ともいっている。それゆえ、「規範論」にあつては、正しい思考は、良い行為、良い生活に通ずる。つづく問題は、そこから生ずる。すなわち実践的理解である。そこにおいて、目的の動物、行動の動物としての人間が研究されている。人間の行為に関する問題のあつかいからして、人によっては、この第二部の方を高く評価しているようである。

「規範論」は、終始、全き人間を念頭に扱われていると考えてよい。カント以来、人間の分離を基礎にして哲学する方法が導入されてきたことが、ここで、思いおこされる。人は一面、非理性的な経験を根に置く、すなわち、本性、物質的目標にしたがうものだが、他面また、純粋理性の存在で、厳密にいて、理性的なるもの、宇宙に法を立てるものでもある。これら二人の人間は、いよいよ離れていて再びひとりの人間にもどろうとしなかったのである。そこから追求することの不如意によって、一連の哲学上の反動が生れ、価値哲学にもいたる。

全人ということが、「規範論」以来、バルメス哲学の仮定としておかれ、ビックの哲人はこの点について何らの逡巡を見せなかったのである。はじめの方で引用したように、彼は、「規範論」の結尾で、「立派な論理学は、全人をふくむものでなければなるまい。」と確言し、ついで「人は小世界である。その能力は数あって、すこぶる種類に富む。よって調和を必要とするが、よい組合せのない調和はないし、ことおのおのその処をえなくても、また、適時に、その機能が働かぬか停止されるかしても、当をえた組合せはないので

ある。人が、その能力について、なんらの行動に出ないままにいるなら、その人は、ぜんまいを失った一個の機械同然だ。」と、人間の機能的統一を強調する。

そこに心情の回復がうごく。19世紀前半の心理学の発達の影響をうけているせいもあるが、バルメスは、心情的要素に大きな役割をもたせている。彼にあって、corazón の用語は、パスカルの coeur とおなじからず、一言でいうなら、英語の judgement, フランス語の bon sens, sentiment などの同義語で、共通常識にも通ずる。理性によって明らかにされるものではなく、それは、いわば自然発生的なものである。

バルメスは、心情が常に的を射るものであるか、と自問する。しかり、心情から、すべては発する、というのが自答だ。それは、あらゆる種類の音階を発するすばらしいハーブである。地獄の洞穴のすさまじい大音響から、天国のげにも微妙な調和音にいたるまで。しかして、バルメスは、心情から出る靈感というものを検討して、「なぜに、その本質的正鵠が心情に帰せられるか。」と問い、「われわれの本能のまちがいだらけのなかにおいて、正鵠が一つあるということが、とくに、われわれに関心と呼ぶからである。」と答えるのである。暗のなかの的中。バルメスは、そこで、矛盾の深さに沈む盲目的衝動と、共通常識という静かな命令とを区別する。後者は、本能的人生案内の主、多くの面で、その行為に過誤を来たさず、的をはずすことがない。

「規範論」には、他にも、人間精神についての、深く細微な多くの観察がふくまれている。この哲人は、思考と行為のなかにおける心情的要素のもたらす影響を徹底的に、また、種々なる過程を通して研究したすえ、心情のなかに、性格の欠陥と破綻の主たる原因を見たのであった。感情の浮薄なところを点検する、そして、それは彼に「感情はそれ自身で、行為の悪しき規準になる。」といわしめる。バルメスは、決して純粹に理性の人ではないのであって、われわれの不可能とする心情的要素に、正しい価値をあたえることができたのである。実践にかかるいくつかの知的現象に注意深く気をとどめ、社会生活にあっては、単に、理知と理知との通交ではなく、心情と心情

とのそれがあるとの結論をもたらし、行為の面にあつては、道徳的感情こそが、徳を助け徳を強めることになる、と述べている。この点からいふなら、バルメスは、人生という最偉大の書物から学ぶところ多かつた哲人ということができよう。

「規範論」のなかに扱われている職業への関心が、教育的意味をもっていることも見おとすわけにはいくまい。バルメスの考えでは、人はめいめい社会に有用な要素であり、その人間的才能をもって、妥当せる仕事をなし遂げねばならぬものである。人が、そのために生まれなかつたような職業につくということであれば、それは脱臼せる骨片の類だとして、子供に特有の才能を識別するための実験が提示されている。これは、今日、各処でおこなわれている職業指導の心理的な方法なり実践なりを予知しているものといえる。

「規範論」の著者はまた、彼のいわゆる「万能性」すなわち知識教育の百科辞典的行き方については、方向を異にし、強い言葉をもって「専門」の立場を固持したのであつた。バルメスの本旨として主張せる全き人を回復することこそ、さしせまつた問題となつてゐる今日の世界では、支持できないことであろうが、たとえばバルメスは、「一人の若者が文学者になることはよいことだ。が、施設の前に立ち、機械の短所や操作過程の適、不適を知るうゑに、ウォルター・スコットやビクトル・ユーゴの輝やかな断片的文章がなんの役にたとう。」などといつてゐる。「規範論」をもつて、俗っぽい本とする評価も、あるいは、こんなところからきてゐるのかもしれない。だが、心の用意のできたものにとっては、誰にでも読まれ、かつ理解されるめづらしい性質をそなえた書物が「規範論」なのである。バルメスが、この本によつて理想とするところは、心の高さとその単純、透明な表出との平衡を保つ人間、規範をもつた正常の人間のタイプを樹立することである。「規範論」の味読によつて、銜学の徒はいわづもがな、角のある人物も生まれるはずはないといわれるのも、ゆゑあることであろう。

アリストテレスは、人は天性、幸福をねがうと同時に知らんとおもう、と

いったが、バルメスの信ずるところもまた、存在することと行ずることは一体であるということだった。現代的にこれをいえば、思想と生活の一致といってもいい。およそ、相対論ほどバルメスから遠いものはない。彼のいう共通常識の問題は難しい問題だし、その玄義的問題が、解明しつくされているわけではないのであるが、たとえば、バルメスは、6章の最後の節を「本能的とみえる行為の理由」と題しており、このあたりに「規範論」中における常識説のかぎがあるように思われるのである。「旧来の人たちとはかわった方式による人間精神の能力を導き出すための試論」とバルメスが「規範論」を公にするにさいして述べた志向の表明も、そこらから、わかる気がするのである。

彼の独創的な方法論にいたるまでには、バルメスは、あたら限りの論理学の書物の読破と、しかるのち、これら著者の伝記の耽読に当り、書物に求めえなかったものを、その生活に期待した。しかし、どこにも光を見出さず、最後に、険路をよじ登る旅人のごとく、大いなる魂のよろこびをもって、真理の渴望にこたえる隠れた小径を見つけたのであった。この著述が、はじめ連続講演のような体裁で、何ものかにひかれるままに、章節に分けることもなく、書きつづられたこと自体が、それを明らかに物語る。だから、バルメス自身もった評価を、そのまま、「プロテスタンティズムとカトリシズム」とともに、彼の二大著書ともいべきこの偉大なる書物が示しているのであり、道を求めて砂漠を通る長い、つらい巡礼のあとの、知的闘争の解決ともなったのである。

「学問の分類」(12章1節)という手短かな意図をもつ文章でも、彼は、哲学に永遠の目的をふりむけ、哲学者が存在物の本性と属性と諸関係とを探求する役目をもつべきであることを指摘している。したがって、基礎のない知的ぬれぎぬの侵入を防衛するための知識に力点をおいたのも彼であり、知識の増大は、悪に傾きやすいとする当時のある種の人たちに対抗し、「学問は実践にとってしごく有用だ。」(22章55節)といい切っており、「規範論」

にふくまれている深い哲学的直観とスコラ哲学復興の功を、私たちは彼バルメスに負っていることを知るのである。今日の言葉をもってすれば、技術の価値を主張したことにもなるのであろうか。それにしても、思い合わされるのは、17世紀末よりこの方、凋落の一途をたどり、いよいよ自身の力への信を失っていったバルメスの祖国イスパニアの歴史的姿のことである。歴史的狂瀾の時代に生きたバルメスはおなじような時代にあって、生き返り、いよいよ明らかにその存在を示すにちがいない。その生み出された著作をもって。

× × ×

歴史の彼岸を如実に写し、時代の危機を分析せずし、このビックの人とその著述をえがくことは難しい。ましてや、「規範論」のごとき純粹思考の著作は、その堅さのゆえに、必ずしも多数者の関心をひくものではないので、すぐれた抽象理論が、現実に広まるには、なお多くの年月を要するであろう。だが「規範論」は、本質的に教育的著述であり、したがって、直接的、積極的、広汎な活動の分野で、その結実をおさめうるものと信ずる。1962年7月、私は、バルセローナから北へ、バルメスの時代にはいまだ敷設されていなかった鉄道を利用して約2時間、喝望久しい彼の生地ビックの地を踏んだ。書店「サラ」(Sala)の主人の通報からその地の新聞「アンソーナ」(Ansona)によって、さっそく東洋の一貧書生の訪問が報ぜられたりしたことからも、この町全体が、今日も、世紀の偉人ハイメ・バルメスの遺徳のなかに生きていることが知られた。フンイェント師(Mons. Junyent)の親切な案内で、古い石だたみの街をぬって、バルメスの生家や図書館、臨終のベッドをはじめ、彼にかかわる多くの遺物に接することができたのは、私にとって大きな感激であった。そのうえ、市役所からは、前記書店主の厚意ある紹介で、約30冊の資料の受贈をえた。このことがなかったなら、彼の全集と伝記とをまえに、いたずらに思いはるけくして志の遂げられなかったことを考えれば、ただ感謝のほかないことをここに記さねばならぬ。

(1964. 6. 20)